

# 小児科だより vol.2

## ☆B型肝炎ウイルスワクチン定期接種化へ★

2016.10.3 発行

こんにちは、10月にはいり今年も残すところあと3か月となりました。今月の小児科だよりは、最近外来でもしばしば話題にあがるB型肝炎ワクチンの定期接種化について、自分なりにまとめてみました。予防接種に関しては、様々な考え方やご意見があるかと思いますが、一つご参考にして頂けると幸いです。



これまで日本では限られた方しか公費でB型肝炎ワクチン（HBワクチン）を接種することが出来ませんでした。具体的には、『B型肝炎母子感染防止事業』に該当する赤ちゃんたちです。それ以外の赤ちゃんたちは、任意でHBワクチンを接種してきましたが、平成28年10月1日から定期接種化されることになりました。新たに公費でワクチンを接種できるようになったのは、平成28年4月1日以降に生まれた方で、かつ、0歳児のみです。生後2か月から合計3回接種することになりますので、公費（無料）で3回の接種を完了するためには、1歳のお誕生日の前日までに3回目の接種を終了する、つまりその20週間前までに1回目の接種を行う必要があります。予防接種の詳しいスケジュールに関しては、小児科だより内のリンクをご参照ください。

1992年に世界保健機関（WHO）がHBワクチンのユニバーサルワクチン※<sup>1</sup>（後で説明があります。）を全世界の国々が実施するように勧告し、2011年の時点で実に180か国においてHBワクチンが乳幼児の定期接種に導入されました。一方、日本（やイギリスや北欧諸国）では、『B型肝炎母子感染防止事業』のような感染リスクが高い集団を接種の対象としてきました。実際に、日本において『B型肝炎母子感染防止事業』を開始（1986年）して約10年間で、小児期のB型肝炎ウイルスキャリア（HBVキャリア※<sup>2</sup>）は、10分の1以下に激減しました。しかし、このように母子感染例は減少した半面、父子感染をはじめとする家族内感染、原因不明の水平感染※<sup>3</sup>などによってHBVキャリアとなってしまった小児が問題になってきました。2007年の全国調査では、小児のHBVキャリアの約1/3が水平感染によって発生していることがわかりました。これは、わが国ではすべての赤ちゃんに対して、HBワクチンを接種するユニバーサルワクチンではなく、一部のハイリスク者のみを対象とした事業を行ってきたため、国民の大多数がB型肝炎ウイルスに対する免疫

をもっていないことに起因していると考えられました。そしてこのような経緯により、いよいよこの10月1日からB型肝炎ワクチンの定期接種が始まりました。この定期接種化と前後して、独自の補助を行う自治体が増えてきています。各種補助や接種期間などの詳細につきましては、お住いの自治体へお問い合わせください。

※<sup>1</sup>ユニバーサルワクチン：誰もがもれなく、経済的な負担なく受けることが出来るワクチンで、日本ではいわゆる定期接種となっているワクチンのことを言います。それに対して、『B型肝炎母子感染防止事業』のようにハイリスクの限られた人を対象として接種するワクチンを『セレクトィブワクチン』と呼びます。

※<sup>2</sup>HBV キャリア：B型肝炎には、一過性感染と持続感染という二つの感染様式があります。多くの感染者は一過性感染後に治癒しますが、一部持続感染となり生涯B型肝炎ウイルスが体内に残ることがあります。免疫力が未熟な状態でB型肝炎ウイルスに感染した場合に持続感染を起こしやすく、乳幼児期は持続感染のハイリスクといえます。持続感染者のうち発症していない方をHBV キャリアと呼び、将来慢性肝炎、肝硬変、肝臓がんを発症する可能性があると言われていています。

※<sup>3</sup>水平感染：母子感染を垂直感染と呼ぶのに対して、母子間以外に感染源から周囲に感染することを表します。血液を介した感染以外にもHBV キャリアの尿、唾液、涙、汗などにもHBウイルスが存在することが明らかになっており、感染源になり得る可能性が示されています。